



茅ヶ崎市教育センター
Chigasaki Educational Center

子どもたちのために
ともに教育環境を考える
教育センターの教育情報誌

学びあう響きあう

第9号

平成27年3月31日発行

編集担当/茅ヶ崎市教育センター
住所：茅ヶ崎市十間坂三丁目5番37号
☎ 研究研修担当（市青少年会館3階）
☎ 0467-86-9965
☎ 青少年教育相談担当（同館2階）
☎ 0467-86-9963
URL:<http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kyouiku/1005049/index.html>

教育センターでは、「教育研究」「教育研修」「教育相談」の推進をしています。「教育研究」では、小・中学校の教育に関する様々な研究、幼児期の教育に関する基礎研究を行っています。「教育研修」では、研究成果を土台にした教職員の専門的な研修や市民の方々への家庭教育・幼児期の教育に関する講座などの機会を通して情報提供を行っています。また、長い歴史をもつ小学校中学校創意工夫・研究作品展も本教育センターが担当し、子どもたちの創意・研究心の育成に向けた取組を行っています。「教育相談」では、児童・生徒の様々な悩みに応え、自律性をはぐくむ支援ができるよう努めています。

【Contents】



- 幼児期の教育についての研究から見てきたこと (P.1)
- 茅ヶ崎市小学校中学校創意工夫・研究作品展のお知らせ (P.5)
- 一人で悩まないで相談しようー青少年教育相談室から (P.6)



幼児期の教育についての研究から見てきたこと～5年目のあゆみ

子どもを一人の人間として理解し、見守り、尊重する大切さ

子どもを育てる時、ついつい自分の思いどおりに育てたいと思いがちですが、子どもは親とは別の一人の人間。親の思うとおりに育てないのは当たり前です。親が、そして大人が、時には子どもとぶつかりながらも、子どもに対して本当にしなければならないのは、子どもを一人の人間として理解し、見守り、尊重することなのではないでしょうか。

第9号ではそんな思いを強くする3つの講演内容を紹介します。

- 「親子の豊かなぶつかりあいー親が子どもをイヤになる気持ちを見つめて」より抜粋
青山学院女子短期大学准教授 菅野幸恵氏、乳幼児期の子育て・子育て出前講座、平成26年10月25日（土）
- 「青年期の心を探るー大人へのプロセスー」より抜粋
横浜市立大学准教授 平井美佳氏、子育て・子育て出前講座【思春期編】、平成27年1月24日（土）
- 「子どものいのちに寄り添うときー小児科医として支えた子どもたちー」より抜粋
聖路加国際病院顧問 細谷亮太氏、平成26年度茅ヶ崎市教育講演会、平成27年1月17日（土）



親子の豊かなぶつかりあいー親が子どもをイヤになる気持ちを見つめて

平成26年度開催「乳幼児期の子育て・子育て出前講座」より抜粋
(講師 菅野幸恵氏、H26.10.25開催)



育児感情の研究を始めるきっかけ

「子育てしていれば、子どもをかわいいと思う時と、イヤだと思いう時、両方あるだろうな。」という漠然とした疑問がありました。そんな時、インタビューした母親が「それはもう、イヤだと思わない時がないくらいよ。」と明るく語るのを聞いて「これだ！」と思いました。つまり、子どもとの抜き差しならない現実を生きるその中に、親子の豊かな部分があるのではないかと思ったのです。

そもそも親子関係とは

子育ては、「無償の愛」、「親子愛」のように、ともすればロマンチックに語られがちですが、子どもを育てていけば、誰でも、子どもをイヤだと思いう時があるのではないのでしょうか。親子も一人の人間同士の関係ですから、親和的でありながら、反発的であるのは当然です。その反発的な面がもつ積極的な意味を考えてみたいと思います。

子どもをイヤになる時

子どもをイヤになる時を母親に聞くと、こんな時が多いことがわかりました。

- 子ども同士のトラブルが起きた時
- 時間や心身に余裕がない時
- 言うことを聞かない時
- 無理な要求をする時
- 親子関係が変化した時(子どもが成長した時)

子どもをイヤになる理由

子どもをイヤになる理由は、子どもの成長とともに変化します。

- 0ヶ月の頃…子どもがどうして泣いているのかわからない時
- 9ヶ月の頃…子どもが危険に近づく時
- 18ヶ月の頃…子どもの中に“わたし”が芽生える時

そして、子どもが24ヶ月の頃には、母親が子どものイヤなところを生来の性格として語り始めるようになります。これは、そうでもしないとやっていけないためと思われま

エピソード1

「(子どもをイヤになるのは、)玄関の戸を閉めない時。繰り返し繰り返し言うんですけど、言うたびに「ハイ。」とか言いながら閉めに行ったりする。自分でも気付いて閉めに行ったりもするんで、言わなくてもわかるようにはなってきたんですけど、やっぱりめんどくさいとか、したいことが先ですから、ついついでしょうね。」(4歳11か月男児の母)

このエピソードからは、母親が子どもをイヤになることを通して、子どもの成長を感じていることがうかがえます。

エピソード2

「下の子が大泣きしててそっちで必死だったり、自分が疲れてるのに私の後をちょこちょこついてきたりすると『もーうるさい』

と思う。同じことしても朝は笑っていたのに、夕方同じことされると無性に腹が立ったり。だから、いつも余裕をもってないといけないな—ってというのは感じるけど。」(2歳11か月女児と7か月男児の母)

このエピソードからは、母親が子どもをイヤになることを通して、自分の子育てを振り返っていることがうかがえます。

子どもがかわいい時

反対に、子どもがかわいい時を母親に聞くと、たいていは「子どもが寝ている時。」という答えが返ってきます。それは、子どもがいくつになっても変わりません。つまり、子どもとの親和的な面からは、子どもの成長に対する気付きも、子育てに対する振り返りも、子どもとの反発的な面から出てくるほどには出てこないのです。

父親は子どもをイヤにならない？

父親は子育て参加度が低い人ほど子どもをイヤにならないようです。それは、イヤと思うほど子どもに関わっていないからでしょう。困ったことが起きても自分が最後まで抱えないで母親に任せてしまう、つまり、「いいとこ取り」をしているため、父親が子どもをイヤになることは少ないといえそうです。

子どもをイヤになることの積極的な意味

親は子どもをイヤになることを通じて、子どもの成長に気付いたり、自分の子育てを振り返ったりすることが出来ます。子どもの育ちや子育てを振り返る契機としての「子どもをイヤになること」というものがあるのではないのでしょうか。

まとめ

子育てに正解はないし、間違いもありません。

子育てというのは、それぞれの親子が折り合って、それぞれにふさわしいやり方を、つまずきながら選んでいくことです。

虐待に関しても“あつてはならないことだ”という発想からの対策は必ず失敗します。子どもは自分だけで育てようとしなくていいことが、親にとっても子どもにとっても大切です。子どものことを語れる仲間をもちましよう。

青年期の心を探る —大人へのプロセス—

平成 26 年度開催「子育て・子育て
出前講座【思春期編】」より抜粋
(講師 平井美佳氏、H27. 1. 24 開催)



発達とは何か？

発達とは、生まれてから死ぬまでの変化、成長のことです。獲得と喪失のダイナミックなプロセスでもあります。発達には生物学的要因と社会的要因が相互に関わりあい、生物-心理-社会的に捉える必要があります。

青年期とはいつのことか？

青年期とは、個人が成人期に向かって育っていく児童期と成人期の間であり、「大人でも子どもでもない」時期といえます。

青年期の始まりは、思春期(12歳前後)頃です。日本では、青年期前期は小学生の終わりから中学生頃、中期は高校生頃、後期は高校卒業後、大学生頃とする教科書も多いです。

反対に、青年期の終わりは、明確ではありません。動物では成体になる時期が比較的明確ですが、人間の場合はあいまいです。昔は「通過儀礼」の文化があり、「これができたら大人」というものが

ありましたが、現代では高学歴化や晩婚化により、青年期の終わりがさらにわかりにくくなっています。近年では、「成人形成期」という20歳頃から25～30歳くらいまでの、青年期から成人期への移行期も考えられています。

身体的変化

青年期は、身体が未成熟な状態から成熟へと向かい、生殖が可能な状態へと変化します。これを二次性徴と言います。この身体的変化の影響により、性役割が再構成され、周囲の人々、特に異性との関係に変化が現れます。早期に初潮を迎えた女子に抑うつや不安が強いと言われています。

心理的变化

青年期は「形式的操作期」と言って、論理的思考が可能になります。具体的には、仮説を検証したり、物事を抽象化したりできるようになります。このように、青年期は思考力が高まりますが、それを十分使いこなせない時期でもあります。

青年期には、主として次のような心理的变化が現れます。

- 自己の多面性を理解するようになる。
- 他者の評価に過敏になり、自己評価が揺らぎやすくなる。
- 自己の矛盾に気付き、葛藤するようになる。
- 自分の将来、価値観や主義について考えるようになる。
- アイデンティティを模索し、獲得しようとする。

子どもは自分自身のこういった心理的变化を「自分だけの悩みで誰にも理解されない。」と感じやすく、それが周囲の大人から見た扱いにくさにつながる場合があります。青年期の心理的变化の特徴を、子ども自身や周囲の大人が知っておくことにより、その悩みや扱いにくさがず

いぶんと軽減されるのではないでしょうか。

社会的変化① 親子関係

青年期の親子関係は、「心理的離乳」と言われ、親をより客観的に観るようになります。また、親子間の葛藤(けんか)は、主として、親が子どもの自由をどこまで認めるかに関して生じます。多少の親子間葛藤は、子どもが親に庇護される立場から、より自律的な個人へと育てている証とも捉えられます。

こうした青年期の子どもとは、子どもの意見を尊重するオープンなコミュニケーションをとることや、家族の決まりごとを守ってもらいたいときに了解可能な根拠に基づくルールを明確に示すなどいわゆる民主主義的な関わり方をすることが、良い結果をもたらすと言われます。

社会的変化② 友人関係

青年期の友人関係は、考えや感情を共有し、互いを信頼し、平等性を重視した、親密なものに変化します。親密さのあまり、時には悩みを話し合い過ぎて、友人の悩みが自分の悩みになってしまうこともあります。

仲間関係が多様な集団、気の合う友人同士の関係になる一方で、異性関係の重要度も徐々に上がっていきます。表面的な結びつきから内面的な側面の重視へと変わっていくのが、この時期の友人関係の特徴です。

アイデンティティの模索

アイデンティティ(自我同一性)とは、「自分とは何か?」という問いに対する答えです。青年期は、このアイデンティティの確立や獲得を模索する時期です。

アイデンティティを確立するには、自分が連続して同じ個人であると感じられることと、そのことを自分以外の他者も知ってい

ることが重要な要素となります。すなわち、一人で考えるだけではなく、他者に支えられることも重要です。

青年期に起こりやすい問題

アイデンティティの確立に失敗すると、「アイデンティティ拡散」の危機に陥ります。アイデンティティ拡散とは、「自分が何者か、自分が何をしたいかわからない」状態のことです。

アイデンティティを模索するモラトリアム(猶予期間)である青年期においても、アイデンティティ拡散状態と類似の状態が生じることがあります。このこととも関連して、青年期には次のような問題が起こりやすくなります。

- 対人不安(対人緊張、気遅れ、あがり)や対人恐怖(他者視線恐怖、赤面恐怖、自己視線恐怖、自己臭恐怖)
- 無気力、無力感(アパシー)
- 非行、暴力
- 摂食障害

アイデンティティの生涯発達

アイデンティティを獲得したからといって大人になったということではありません。また、青年期に獲得されたアイデンティティがその後も一定というわけではなく、ライフイベントなどをきっかけとして変化していきます。つまり、生涯に渡って、アイデンティティは再構成されていくのです。

青年期と関わる工夫

青年期と関わる工夫としては、次の2点が挙げられます。

① 青年期の課題の理解

青年期の子どもたちが様々な身体的・心理的・社会的変化の中で成長し、自分と向き合おうとしているのだということへの理解が大切です。子どもの生意気な態度に大人が感情的に振り回されないことにも役立ちます。

② カウンセリングの基本姿勢

次のようなカウンセリングの基本姿勢をもつことも役立つことが多いはずです。

●相手に関心をもつ。(そのことを相手に伝える。)

●相手の話にじっくり耳を傾ける。(相手に自分の意見を押し付けない。)

●相手の課題解決力を信じる。(相手が考えている時は待つ。)

●相手に関して今ある情報を正確に利用し、わかった範囲のことを相手に伝える。(相手が言ったことを繰り返す。答えは出してあげなくてよい。)

まとめ

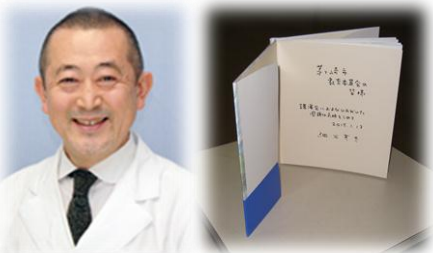
青年期の子どもたちは、身体的・心理的・社会的変化の中で、自律性と依存性のバランスを取ろうとしています。この過程で、不安や混乱が生じることもありますが、やがて自分なりに方向や方法を見つけていきます。

周りの大人は、そんな青年期の子どもたちを理解し、見守り、尊重しようという基本的態度でいることが大切です。ルールを守ってほしい時は、根拠をわかりやすく示しましょう。自分がどうだったか(特に失敗談)を話すのもよいでしょう。そして、もしも青年期の子どもで困ったら、一人で抱え込まずに、誰かに相談したり、周囲の人々を巻き込んだりしてみてください。

(P.6に相談先が載っています。)

子どものいのちに寄り添うとき —小児科医として支えた子どもたち—

平成 26 年度開催「茅ヶ崎市教育講演会」より抜粋
(講師 細谷亮太氏、H27. 1. 17 開催)



少なくなってきた子どもの死

日本では1950年には年間約20万人の子ども(20歳未満の人)が亡くなっていました。それが1965年には4分の1の約5万人、1980年には半数の約2万5千人、1995年にはさらに半数の約1万2千人、そして2010年には約5千人になりました。私たちが生まれた頃には1歳にならずして亡くなる子どもが千人に何十人もいましたが、今は千人に2人です。昔は10人に1人の母親が乳児を亡くしていたのに、今は乳児を亡くす母親がほとんどいなくなりました。

6歳の子どもの見せた優しさ

余命わずかな6歳のSくんが病室で知り合った同い年のTくんの怪我を気遣い、「気をつけて来てね。」と声を掛けます。Sくんは「小学生になったら勉強したい。」とも言います。Tくんは「Sくんの面倒を見るために夜中起きてるんだ。」と言います。そして目の見えないSくんのために絵本の説明をします。わずか6歳の子どもたちがこんな優しい心をもっているのです。

子どもに関わる時の大原則

子どもに関わる人が守らなければいけないことが3つあると思います。それは、

- ①子どもにうそをつかない。
 - ②子どもにわかるように話す。
 - ③それを聞いたら子どもがどう反応するかというイメージをもちながら話をする。
- ということです。

優しさを思い出させる環境

幼い子どもは皆、優しい気持ちをもっています。学童期から思春期にかけては、その優しさを思い出させるような環境を作ってい

くことが大切だと思います。

感情を伝える

僕は診察中マスクをしません。マスクをしていると、子どもに感情が伝わらないからです。子どもと接するときは、目を見て、口角を上げ、顔全体で笑顔をつくるようにしています。そうすると3~6か月の赤ちゃんでも、99%ニコツとしてくれます。

死への納得

『わすれられないおくりもの』という絵本があります。これを読むと、大人は思い出をたくさん残せることがわかります。

子どもにこの絵本を読んだ時、「悪くなっていたものが治って、体が軽くなって、天国に行くなら、しかたがないね。」と言いました。そうして子どもは、人の死を納得していくのかもしれない。

大往生だらけになった時

始めにお話したように、現代では子どもが死ぬことはまれになり、大往生する人が増えました。けれど、大往生だらけになった時、命の大切さや切なさは、果たして子どもたちに伝わるのだろうかと思います。例えば、ペットなどの死をとおして、子どもに命の大切さや切なさを伝えるようにしたいものです。

命をいただくということ

僕は校医をしていたことがあるのですが、ある学校では、食事のときしゃべらないように指導されていました。食事のときしゃべらないというのは、昔はよくあることでした。食べるときしゃべらないのは、命をいただくからです。それだけ、命をいただくことへの思いがあったということでした。

【研究研修担当】